

一 次の文章を読み、後の問に答えよ。

よくわからないけど二十回くらい使った紙コップをみたことがある 飯田有子

一読して、不思議な気持ちになった。「二十回くらい使った紙コップ」とは、なんてしょぼい。どうしてそんなモノをわざわざ短歌にするんだろう。そう思いつつ、**A**、心のどこかに妙に触れてくるものがある。

作者の考えとか、作中主体である〈私〉の喜怒哀楽^a アイラクとか、だからなんだとかいうことが、ここには一切書かれていない。唯一の思いといえそうなのは「よくわからないけど」つてところだ。

何故「よくわからない」のか。たぶん「二十回くらい使った紙コップ」という存在自体が、作中の〈私〉にとって想定外だったのだから。

これが「使い込まれた器」なら話はわかる。**B**「使い捨てられた紙コップ」でも。しかし、「二十回くらい使った紙コップ」は、そのどちらとも違っている。繰り返し使われた紙コップ、という^bムジエンした存在感が奇妙なオーラを生み出しているようだ。

とはいっても、現実的にそういう状況はあり得るだろうし、それを生理的な感覚に従って「汚い」とか「貧乏臭い」とかいつて無視してしまうこともできたにちがいない。だが、作者はそうしなかった。

わざわざ短歌にした。**C**、結びは「みた」ではなく「みたことがある」である。これによって、一首は^①単なる報告以上のニュアンスを伴うことになる。ある日あるところでみかけたそのつてのことを、作者はわざわざ思い出しているのだ。ここにはある種の感情移入があるんじゃないか。

でも、ぼろぼろの紙コップに対して、一体どんな思いを寄せるというのか。ここからは私の想像になるが、例えば、我々が年をとつておじいさんやおばあさんになったとき、この^②「二十回くらい使った紙コップ」的な存在になるんじゃないか、という考えはどうだろう。

昔の老人はそうじゃなかった。経験とそこから得た知恵の裏づけが彼らに「使い込まれた器」の存在感を与えていた。しかし、我々はそうはなれないだろう、という予感がある。経験や知恵は蓄積されなまま、単に年をとつてぼろぼろになるだけの可能性が高い。尊敬される老人にはなれそうもない。

(1)、と思う。昔は「紙コップ」なんてモノ自体が存在しなかった。**D**、自然に「使い込まれた器」になれたのだ。だが、我々は「紙コップ」を開発した。使い込むよりも使い捨てを、修理よりも買い換えを優先する社会システムを採用した。生活のなかで周囲のモノを次々に使い捨て買い換えておいて、自分だけは使い込まれていい味が出たモノになれると思うのは虫が良すぎるだろう。

ぼろぼろの紙コップ的の老人になった自分が、未来の若者たちから「よくわからないけど」と遠巻きにされることを想像してしまう。そんな直観が、私をこの歌に立ち止まらせたのだ。

牛乳のパックの口を開けたもう死んでもいいというくらい完璧に 中澤 系

このような歌の背後には、使い捨ての効率重視的な社会システムに同化した〈私〉が張り付いている。

保存、^cエイセイ、輸送、リサイクルなどさまざまな観点から試行錯誤を重ねた結果、「牛乳のパック」は現在のかたちに進化してきたのだろう。それでもあの「口」は決して開けやすいとはいえない。だから、それを「完璧」に開けることには達成感がある。

もちろん、そうはいつても、「牛乳のパックの口」を「完璧」に開けたくらいでいちいち**(2)**なんて思っていたら身がもたない。

だが、〈私〉は知っているのだ。この先何十年も「牛乳のパックの口」を「完璧」に開け続けたとしても、^③そこに未来は存在しないことを。そのスキルがおばあちゃんの知恵的な価値を生じることは決してないだろう。ある日、口開けシステムがより便利なスタイルに変更されれば、全く無意味な技になってしまうのだ。

システムに従い続けてぼろぼろの「紙コップ」になることになんとか^d拗手はないのだろうか。こんな歌をみたことがある。

あの紙パックジュースをストローの穴からストローなしで飲み干す 盛田志保子

「紙パックジュース」を飲むとき、我々はパック側面に斜めに張り付いたストローをむしりつつ、シャキーンと伸ばして、プスツと刺して、ちゅーちゅー吸う必要がある。ジュースの残量が少なくなると必死にパックを傾けて、なんとかストローを届かせようと苦心する。ずずずー。それでも底に少し残ってしまつて気持ち悪い。

「牛乳のパック」同様に「紙パックジュース」もまた**(3)**にあるはずなのに、どうしてそんなことになっているのだろう。

そんなとき、「あのこ」と出会った。「ストローの穴からストローなしで飲み干す」^eヤベッさを〈私〉は^f呷しくみつめていた。

(穂村弘『ぼくの短歌ノート』講談社文庫・二〇一八年より)

問一 ― 線部 a 及び f のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 **A** 及び **D** のそれぞれにふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ(同じ記号を二回以上用いてはならない)。

イ しかし ロ だから ハ あるいは ニ たとえば ホ しかも

問三 傍線部①「単なる報告以上のニュアンスを伴うことになる」の説明としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ たまたまそう感じた人がいたという証言を、世代を超えた共感の存在を暗示させている。
- ロ そういものを見たという連絡にとどまらない、激しい嫌悪感の提示にまで達している。
- ハ そんな誤った使い方をする人への忠告は、現代の全ての人々に向けられた普遍性を持っている。
- ニ そんな不自然なものが存在していることへの注目に、現代社会に対する批評性がそなわっている。
- ホ そういものを見逃さずに取り上げたところに、その貧乏くさを拒否する意思が見出せる。

問四 傍線部②「二十回くらい使った紙コップ」的な存在」とはどのようなものか。本文中の表現を用い、末尾が「の存在」となるようにして、合計三十五文字以内で答えよ（句読点は字数に含まない）。

問五 (1) にふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ これは心がけや努力の差である
- ロ これは心がけや努力の差ではない
- ハ これは心がけや世代の差である
- ニ これはめぐり合わせや努力の差ではない
- ホ これはめぐり合わせや努力の差である

問六 (2) にふさわしいことばを本文中から七文字以上十字以内で抜き出して答えよ。

問七 傍線部③「そこに未来は存在しない」のはなぜか。次の中から選び、記号で答えよ。

- イ 紙パツクの口を開ける技術が、いつまでも重宝がられることはないから。
- ロ 紙パツクの口を開けることなど、高齢者がいなくなれば不必要になるから。
- ハ 紙パツクの口を開けたくても、そのような製品そのものがなくなってしまうから。
- ニ 紙パツクの口を開ける技術が、高齢者にまで重宝がられることはないから。
- ホ 紙パツクの口を開けることなど、だれにでもできることだから。

問八 (3) にふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ 効率のほぼ最低段階
- ロ 効率のほぼ最高段階
- ハ 進化のほぼ最終形態
- ニ 進化のほぼ過渡形態
- ホ 進化のほぼ原初段階

二 次の文章を読み、後の問に答えよ。

民主主義にとって言論の自由と公平な言論空間は不可欠である。しかし、二〇一〇年代に入って多くの先進国において言論空間は^a コウハイしている。それを促している原因の一つは、一九九〇年代から急速に進行した情報革命、ITの進化である。

インターネットによってコミュニケーションや情報共有が飛躍的に拡大し始めたとき、情報革命は民主主義を促進するという楽観論があった。情報伝達のコストが小さくなり、ネット上での議論が可能となり、運動やデモの呼びかけも簡単にできるようになる。ネットは人々の意思を集約して世論形成をする新しい武器になる。民主主義を支える政治運動にとって、ネットは便利な道具となった。

しかし、ネットの普及は言論空間の劣化を促進したことも確かである。アメリカの大統領であるトランプが公然としゃべる差別発言や虚偽情報の類は、彼が登場するはるか前からネット上にはあふれていた。情報伝達や言論空間についてネットの普及がもたらす^b 弊害においては、民主化の両義性と似た構図がある。

旧来のマスメディアにおいては、そこで発言する機会を得たのはごく少数の、言論の世界のエリートであった。また、新聞における校閲、テレビにおける審査というチェックや検証の仕組みがあり、人権侵害や虚偽の流布を避けるための抑制の仕組みは幾重にも存在した。保守、革新という立場の違いがあっても、マスメディアでの発言については、一定の品質管理が加えられた。

これに対して、ネットはきわめて平等で、ある意味で民主主義的な言論空間を提供する。知名度は、ネットにおける影響力にとって必ずしも必要ではない。しかし、ネット上の言論については、校閲や審査は存在しない。感情がそのまま不特定多数の目に触れる場に陳列される。こうしたネットの普及が政治にもたらす衝撃について、イギリスのネット研究者、ジェイミー・バートレットが的確に整理している（『操られる民主主義』草思社、二〇一八年）。

彼は心理学者の研究を引用して、人間の行動をつかさどる基本システムに二種類あるとする。システム1では、思考はすばやく、直感的で感情的であり、システム2では、思考は遅く、論理的であり、感情に対する抑制の機能を持つ場合もある。インターネットはシステム1によく似ている。インターネットに情報収集を依存すればするほど、思慮、熟議は疎略になる。また、インターネットが人々を結び付ける際、「再部族化（re-tribalization）」が起きるとされる。ここでいう部族とは、主体的な目的意識を共有して関係を構築するのではなく、特定の感情を共有した閉ざされた結びつきである。特

に、部族を結集する核となるのは、不平の意識である。世の中に対して不平を持つことは政治に対する批判の原動力であり、政治参加の動機となる。しかし、不平がステレオタイプの偏見、差別、憎悪につながれば再部族化は社会を分断し、政治におけるコミュニケーションが困難になる。認知心理学では人間には「確認バイアス」があることが明らかにされている。すなわち、人間はすでに認められている枠組みに従って情報を理解し、同じ考えを持つ者に囲まれ、これまでの世界観と相容れない情報は避けようとする傾向がある。このバイアスによつて、分断は一層促進されるとバートレットは指摘する。

そうした不平は、伝統的な政治エリートや各種の集団に対して向けられがちである。権力にまつわる腐敗や特権を知ると、人々のエリートに対する敬意は低下する。政治は常に批判の対象となる。また、旧来のエリートを批判し、政治過程への直接的なアクセスを持たない庶民の感覚を代表するリーダーへの希求が一般的な現象となる。その反面、団体を単位とした旧来型の政治参加は、腐敗と既得権を助長するものとして否定的な評価を受けるようになる。こうした現象は、トランプ大統領を生み出したアメリカ、EU^c リダツを選択したイギリス、国民戦線のルペンが大統領選挙の決選に進出したフランス、反移民勢力が躍進しているドイツ、オーストリア、オランダ、北欧諸国で程度の違いはあれ、ポピュリズムの高揚という形で共通している。

もちろん、腐敗した政治家に対する怒りが人々に広がることは当然であり、政策的な優遇を得ている集団が批判にさらされることにも理由がある。しかし、多方面の意見を聞いて妥協するという政治家の営み自体が否定されれば、政治という活動は成り立たない。また、労働、社会保障・社会福祉、教育などの分野における人々の権利は、長年の運動の成果であり、それらを既得権として否定することは、無権利の状態に向かつての平等化をもたらす。たとえば正社員や公務員の労働条件をせいたくとして否定するならば、社会全体で低賃金、長時間労働が当たり前となり、結局、働く人すべてが一層苦しむことになる。

いまや世界の民主主義は、自ら生み出した民主化の成果によつて^d クキョウに立たされている。そして、日本も同じ状況に置かれている。

(山口二郎『民主主義は終わるのか』岩波新書・二〇一九年より)

問一 線部 a、d のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 次のア～コそれぞれについて、この文章の内容と一致しているものには○、一致していないものには×をつけよ。

- ア ネットの普及は、民主主義を支える政治運動によつて、便利な道具になり得ると期待感があった。
- イ 情報革命は言論空間を劣化させ、運動やデモなどの呼びかけが簡単にできるようになるので、広がらないという楽観論があった。
- ウ 社会の民主化とネットの普及とは、人々の発言に品質管理を加える必要があるという点で、似た構図がある。
- エ 社会の民主化とネットの普及とは、差別的な発言や虚偽の情報発信も許されるという点で、似た構図がある。
- オ インターネットは直感的な思考によつて人々を「再部族化」する傾向があるため、世界観や情報の共有をより難しくする。
- カ インターネットは論理的な思考によつて人々を「再部族化」する傾向があるため、政治への批判や政治参加の原動力となる。
- キ 伝統的な政治エリートや各集団に対する批判は、ネットの普及に対する反発を招き、庶民を代表するリーダーが希求されるようになる。
- ク 伝統的な政治エリートや各集団に対する批判が、ネットの普及した社会においては高まりやすく、ポピュリズムの高揚を招きやすい。
- ケ 腐敗した政治家への怒りは当然であるが、あらゆる分野の既得権を否定してしまうと、人々は自らの権利をも否定することになる。
- コ 腐敗した政治家への怒りは当然であつて、あらゆる分野の既得権を否定することによつてこそ、働くすべての人の平等が実現する。